

大和物語

百四十五

昔、平城の帝に仕う奉る采女ありけり。顔容貌甚

じう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひ

けれど、逢はざりけり。其の逢はぬ心は、帝を限

なく目出たき者になん思ひ奉りける。帝召してけ

り。扱後又も召さざりければ、限なく心憂しと思

ひけり。夜昼心に懸りて覚え給ひつゝ、恋しく侘

しく覚え給ひけり。帝召しゝかど、事とも思さず、

さすがに常には見え奉る、猶ほ世に経まじき心地

しければ、夜密に出でて、猿沢の池に身を投げて

けり。斯く投げつとも、帝は得知し召さざりける

を、事の序ありて、人の奏しければ聞し召してけ

り。いと甚う哀がり給うて、池の辺に大行幸し給

うて、人々に歌詠ませ給ふ。柿本の丸、

わぎも子がねくたれ髪を猿沢の

池の玉藻と見るぞ悲しき

と詠める時に、帝、

猿沢の池も辛くなわぎも子が

玉藻潜かば水ぞ乾なまし

と詠み給うける。扱此の池に墓せさせ給うてなん、

帰らせ御座しましけるとなん。

百四十六

同じ帝、立田川の紅葉いと面白きを御覧じける

日、丸、

立田川もみぢ葉流る神南備の

三室の山に時雨降るらし

帝、

立田川紅葉乱れて流るめり

渡らば錦中や絶えなん

とぞ遊ばしたりける。

百四十七

同じ帝、狩いと畏く好み給うけり。陸奥国岩手

郡より奉れる御鷹、世に無く賢かりければ、二な

う思して御手鷹にし給うけり。名をば岩手となん

附け給へりける。其れに彼の道に心ありて、預り

仕う奉り給うける大納言に預け給へりける。夜昼

之れを預かりて、取飼ひ給ふほどに、如何がし給

ひけん、逸し給うてけり。心肝を惑はして覓むる

に更に得見出でず。山々に人を遣りつゝ、覓めさす

れど更に無し。自らも深き山に入りて、惑ひ歩き

給へど甲斐も無し。此の事を奏せで暫しも有るべ

けれど、二日三日にあげず御覧ぜぬ日なし。如何
せんとして内裏に参り、御鷹の失せたる由を奏し給
ふ時に、帝物も宣はせず、聞し召し付けぬにやあ
らんとて、又奏し給ふに、面をのみ守らせ給うて、
物を宣はず、怠々しと思したるなりけりと、我れ
にも有らぬ心地して、畏まりて在すかりて、此の
御鷹の覓むるに、侍らぬ事如何様にかし侍らん、
などか仰事もし給はぬと奏し給ふ時に、帝、

言はで思ふぞ言ふに勝れる

と宣ひけり。斯くのみ宣はせて、他事も宣はざり
けり。御心にいと言ふ甲斐なく惜しく思さるゝに
なんありける。之れをなん世の中の人、本をば左
右附けゝる、旧は斯くのみなん有りける。

平城の帝位に御座しましける時、嵯峨の帝は坊に

御座しまして、詠みて奉り給うける、

皆人の其の香に愛づる藤袴

君が御為と手折りつる今日

帝、御返し、

折る人の心に叶ふ藤袴

うべ色毎に匂ひたりけり